典薬少属臣忌部宿禰恵美麻呂・従八位下典薬大属臣大伴宿禰乎智人・外従五位下典薬允臣若江造家継・外従五位下兼行侍医典薬助但馬権掾臣出雲連広貞・従五位下典薬頭兼行左大史大舎人助相模介臣安倍朝臣真貞）が位階の低い人から高い人へと記載されている。この記載順は、『令義解』の序文の日付の後の記載、『延喜式』の各巻数末尾の日付の後の記され方と同じである。

上表文には、編集の目的（病気に対する医者の務めとして、わが国に残っている薬方を集めまとめ、治療に供すること）・記述の範囲（現に勉強している中国の薬方でなく、わが国で伝承されて残っている薬方）・巻数（一百巻）・書名（大同類聚方）等が記され、上表文としての形式を踏まえている。

上表文に記されている五名は、すべて典薬寮の人達である事を考えれば、『大同類聚方』の撰集は典薬寮に臨時の編纂所が新設されて行われたといえる。なぜなら、典薬寮は医療行政を総理し、官人の診察を担当し、医学・薬学を教え、医師らを養成する大学でもあるから、ここで『大同類聚方』の編纂も行われたと考える事は当然である。

典薬寮は宮内省に所属し、少寮である。それ故、官職は、頭・助・允・大属・小属と各一人であることが『養老令』の「職員令」で規定されており、上表文の記載もその通りになっている。そして、五名の位階と官職の記され方は、『養老令』の「官位令」に法ったもので、正しく記載されている。

安倍の官職は、『日本後紀』では「衛門佐」であり、安倍が典薬頭に任命された記事はない。それ故、佐藤は『奇魂』で「大同類聚方」の偽書説の根拠の一つにあげている。この事を考えても、後世の人が、上表文にあるように「典薬頭安倍朝臣真貞」を「侍医出雲連広貞」の前に入れる事は不可能である。また、大初位上典薬少属の忌部宿禰恵美麻呂は、『日本後紀』の条文にも、他の歴史書にも見えず、この上表文にしか見えない人名である。しかし、恵美麻呂の位階と官職名は正しく記載されている。『大同類聚方』には、天平勝宝六年に典薬頭に任命された忌部宿禰鳥麻呂の薬方も収載されている。

この上表文は正格な漢文で、奈良・平安時代に盛んに用いられた四六駢儷体が使用されており、上表文の記述内容を考証すれば、『大同類聚方』の編纂に直接携わった人でなければ記す事の出来ないものであり、後世の人が作成する事は無理である。

（平成十一年九月例会）

〔訂正〕第四十六巻第一号「例会記録」の中の標題で、「の上表文について」が欠如していましたので訂正いたします。

記憶のメカニズムの歴史的考察

鈴木　衛

神経細胞とシナップスによって形成される神経回路網は一定不変のものでなく、神経回路網の伝達効率は神経活動によ

り変化する。これをシナップスの可塑性という。代表的なものを年代順に並べ、解説した。

一、一九七三年に海馬で見いだされた「長期増殖型シナップス」は、外から信号が頻回くると通りがよくなり、「見た、聴いた」とかいう情報をとどめるのに働くものと考えられる。

二、一九八〇年に小脳においてその機序が確定されたもので、小脳の「長期抑圧型シナップス」と云われるもので、プルキニエ細胞に平行線維と登上線維から同時に刺激が入ると平行線維の信号がストップしてしまうものである。小脳のなかではたらいた間違った配線を切って、よい配線をのこしているものと想像される。

三、一九八五年、塚原が、脊髄に入ってくる神経線維を一部切って変性させると、近くの無傷の線維が芽を出してシナップスを作ることが中脳の赤核細胞で起きることを発見した。ネコの前肢の屈曲筋と伸展筋を支配する神経をつなぎ替えると、最初ネコはとまどうが、一週間後には大脳皮質から赤核細胞へのシナップス入力に発芽が起こり、ネコは普通に歩けるようになる。

最近ホルモンと記憶、とくにエストロゲンの作用が注目されている。

他方、物理学者によって「場の量子論による記憶の解釈」がなされている。記憶とは外界からの刺激や、それに対する意識の印象も含めた内的刺激も、最終的に、細胞骨格や細胞膜の中に作られる大きな電気双極子の形に変形された後、その近くの水の電気双極子の凝集体として安定的に維持される。これが記憶の形成過程に他ならない。

脳神経学者と量子脳理論学者の共同研究により、記憶のメカニズムの解明が待たれる。

参考文献

治部真理・保江邦夫『脳と心の量子論』
高橋　康・治部真理『添削形式による場の量子論』

（平成十一年九月例会）

ペスト残影シリーズ　十

ケルンに「ペスト残影」を求めて　その二

滝上　正

ペストの第一波パンデミー（ユスチアヌスのペスト）のときは、ケルンはペストを免れた。第二波は十四世紀から十七世紀まで三百年以上続いた。それは十四世紀中葉の一三四九年の黒死病をもって始まり、今年はそれから数えて六五〇年を経過したことになる。十四世紀にはケルンは黒死病を含めて七波、十五世紀には十波、十六世紀には十波、十七世紀には八波以上にわたりペストに襲われた。この中　一六六五～六七年のペストは、ケルンでも黒死病と並んで、凄惨を極めた。